ポローニア paulownia

筑波大学附属学校教育局
広報誌 ポローニア

令和6年2月29日 発行
通巻第59号

59

【巻頭言】 附属学校教育局 次長 尾白泰次「附属学校群の強み」

2 ●附属学校群の交流行事 ――――西垣昌欣
3 ●「社会に生きる」卒業生講話の取組 ――――高橋佳菜子
3 ●「第12回 高校生国際ESDシンポジウム」を開催 ――――梅澤 智
4 ●附属高校の修学旅行 ――――奥村準子
4 ●「親子で作ろう チャンチキドラム」幼稚部保護者学習会 ――――小笠原志乃
5 ●中学部3年職業教育 ～職場体験学習で生きる力を～ ――――山本夏幹
5 ●きょうだいタイム ～児童が企画するきょうだい学級遠足～ ――――青山由紀
5 ●「祭興 ～想像から創造へ～」第46回 欅祭開催 ――――荒川郁朗
6 ●筑波大学附属中学校 第61回学芸発表会 ――――齋藤正義
6 ●令和5年度 教育実習・研究授業・合評会が実施されました ――――徳竹忠司
7 ●幼稚部「晴天の焼き芋会」――――佐藤朝夏
7 ●駒場の探究 ー城ヶ島 野外実習ー ――――小林則彦
8 ●第18回 筑波大学朝永振一郎記念「科学の芽」賞表彰式・発表会開催 ――――梶山正明

筑波大学
University of Tsukuba

附属視覚特別支援学校小学部図画工作科と本学芸術系との連携事業
〝触れる〟アート GINZA2023 ギャラリー青羅での作品展示
（撮影：宮坂慎司）

巻頭言

附属学校群の強み

附属学校教育局 次長 尾白泰次

OSHIRO TAIJI

私は令和5年4月より附属学校教育局次長／東京キャンパス事務部長として勤務しています。早いものでまもなく1年となります。前職は兵庫教育大学で附属学校も担当しておりました。筑波大学附属学校は前職ではなかった高等学校、特別支援学校もあり、また、歴史のある有名校ばかりで、非常に緊張して着任したことを記憶しています。年度の前半には幸運なことに、学長による全附属学校の訪問が数年ぶりに行われたことから、便乗して全附属学校を訪問することができました。また、附属学校での研究発表会や演奏会などへの参加、会議での各学校の活動報告などを聞き、非常にバラエティーに富み躍動的なものを感じました。特に印象的であったのが、附属学校11校の児童生徒が交流し互いに協力して行事に取り組む10月の「三浦海岸交流行事」、12月の「共生シンポジウム」です。障害のある児童生徒とない児童生徒が交流する姿、障害のある児童生徒同士が協力する姿、年長の生徒が年少の児童を支援する姿など、とにかく迫力のある光景を目の当たりにして感動するとしかいいようがない感覚でした。子供たちが元々持つ力だと思いますが、それらを導き出しご支援・ご指導いただいた先生方のご尽力の賜物であると思います。また、これが附属学校群の強みの一つなんだろうと思いました。

筑波大学は令和5年10月で開学50周年を迎えましたので、附属学校群も筑波大学の附属学校となって50年となりました。次の50年に向けても、こうした附属学校群の強みをさらに生かせるよう皆様と取り組んでまいりたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

附属学校群の交流行事

普通附属と特別支援との連携推進委員会 西垣昌欣

令和5年度に附属学校群全体で取り組んだ交流行事は、①三浦海岸交流行事と②共生シンポジウムの2つです。①は令和5年10月22日(日)、②は12月10日(日)に実施されました。

①には附属11校から76名(現地合流者を含む)が参加し、東京キャンパス文京校舎からバス2台で三浦海岸へ移動して行われました。同海岸で地引網体験を行った後、附属久里浜特別支援学校に場所を移し、班別活動(校内探索と工作)に取り組みました。同行事のために組織された生徒実行委員会が中心となり、誰もが楽しめる活動を企画し、委員が分担して準備や当日の進行に当たりました。日帰り行事でしたが、参加者は短時間で打ち解け合い、積極的に関わり合おうとする姿が見られました。

②は附属中学校・高等学校の桐陰会館を会場に、児童生徒、保護者、教職員等が約150名集まり、第1部では古市理代氏の講演、第2部では各校代表によるシンポジウムが行われました。第1部の講演では、ダウン症のあるお子様と歩まれた道程と共に、多様な特性をもつ人々が地域で暮らすことの大切さを広めるために取り組まれている諸活動等をご紹介いただきました。第2部では①の生徒実行委員会による活動報告に続き、各校代表から①に参加して得た気付きや学び等が発表されました。第1部・第2部共に、フロアの参加者から質問や感想が多数寄せられ、会場全体で「附属のつながり」や「交流することの大切さ」を実感するよい機会となりました。

三浦海岸交流行事(地引網を終えて)

共生シンポジウム(各校代表の発表)

「社会に生きる」卒業生講話の取組

附属桐が丘特別支援学校 教諭 高橋佳菜子

卒業生の講話の様子

高等部の総合的な探究の時間においては、生徒自身がこれから生きていく社会を具体的にイメージし、主体的に問題解決に向けて取り組めるような学習活動を設定しています。1年間の学習を、自身が興味をもっていることを社会とのつながりでとらえる「これから生きる社会と自己の生き方」、多様な人々が生きる社会を見つめる「交流活動」、社会における自己の在り方を探る「社会に生きる」の3つで構成しています。

「社会に生きる」では、肢体不自由者が社会参加するにあたって必要な制度について専門家から講義を受けたり、卒業生から講話を聞いたりします。例年、卒業生の実体験に基づいた講話は、生徒が様々な社会参加や自己実現の在り方があることを知り、卒業後の生活設計に向けて必要なことを考えるよい機会となっています。令和4年度は、大学院で学ぶ卒業生から、桐が丘在学時代のことや進路選択のこと、余暇を含めた現在の生活の様子、大学・大学院での学び、これからの生活などについて、お話をしていただきました。

講話を通して生徒たちは、「高校生の時から『ITの力で困っている人を助けたい』という気持ちを貫き、アプリ開発に尽力している点が心に残った」「卒業後の体のケアについて知ることができた」「大学や大学院での研究のイメージがふくらみ、大学生活が楽しみになった」「(地域で芸術サークルを立ち上げて)コンサートを開くために、助成金の獲得にチャレンジしたことが印象に残った」「人と関わりながら、社会を変えていく」など、「社会に生きる」ことについて様々な視点から学びを深めることができました。

令和5年度の卒業生講話は、2月27日(火)に行います。

講話を聴く在校生の様子

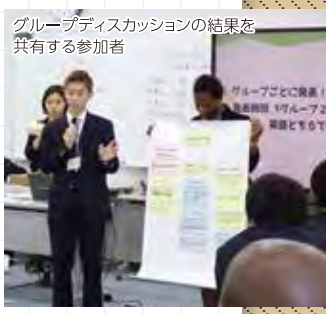
「第12回 高校生国際ESDシンポジウム」を開催

附属坂戸高等学校 農業科 教諭 梅澤　智

アフリカ農業の実態を聞き取る参加者

坂戸高校では、毎年、高校生国際ESDシンポジウムを開催しています。令和5年度は、4年ぶりの対面を含めた、オンラインとのハイブリット開催でした。世界中の人びとが共に生きていく社会の実現を目指した今年のテーマは「Creating harmonious life for the next 5 decades」です。海外姉妹校やWWL関連校、ESDやSDGsに取り組む企業等が参加し、課題研究発表や企業と高校生による持続可能な社会づくりに向けたセッション等を実施しました。

新たな取り組みとして、「農業による国際協力活動へのユースの参加促進に関する分科会」では、JICA筑波と本校が協働で分科会のプログラムを作成しました。国際農業協力分野を職業として選択する若者が減少しているという課題を受け、ユース世代の国際農業協力の認知度向上と将来の国際協力に携わる高校生の育成を視野に入れた分科会です。県内外の6つの高校の生徒たち約60名が、JICA筑波に稲作の技術研修に来ているアフリカの研修生から、母国の農業の実態を聞き取ったり、自身がJICAボランティアだったら何ができるか協議したりしながら、国や地域を超えて、共に食べ、共に暮らしていくための社会参画の方法について検討しました。分科会後は、参加者同士の交流を通じてそれぞれの活動を共有しました。本分科会は対面開催でしたが、同じ場に集い、同じ時間を過ごすことの大切さを実感できた1日でした。


グループディスカッションの結果を共有する参加者

「筑坂」は、50年後の時代を創る世界中のユース世代を結う場として、共に生きる社会の創造に取り組んでいきます。本シンポジウムがその実現の礎になればと考えています。

JICA分科会参加者の皆さん

附属高校の修学旅行

附属高等学校 教諭 奥村準子

伊平屋島米崎海岸でクラスレクリエーション

令和5年11月20日(月)から4泊5日の行程で沖縄修学旅行へ出発しました。直前にインフルエンザが流行した影響で欠席や途中離団・途中参加する生徒が出ましたが、大きな事故やトラブルはなく5日間の旅行を終えることができました。

初日は那覇空港からバスに乗り、コース別平和学習に出かけました。各クラス4名の修学旅行委員が選定した5つの目的地（沖縄平和祈念資料館・ひめゆり資料館・糸数壕・旧海軍司令壕・佐喜眞美術館）から2カ所を選び、見学しました。途中で立ち寄った「道の駅かでな」の学習展示室では、嘉手納基地に隣接する人々の生活について学ぶことができました。

2日目からの2泊は、北部の離島・伊平屋島へ渡り、グループごとの民泊体験と、ボートエントリーによるスノーケリング、クラスレクリエーションなどを楽しみました。「いへやじゅーてー」と呼ばれる手厚いおもてなしを受けた生徒たちは、民家さんとの別れを惜しんで涙する者もいました。

4日目午後に沖縄本島へ戻り、最後の夜は修学旅行委員会が企画したナイトプログラムで盛り上がりました。最終日は班別研修をおこない、那覇空港から羽田へ戻りました。

高校生活最大の宿泊行事を終えて、生徒たちは多くの学びとたくさんの楽しい思い出をつくることができました。平和学習をはじめ沖縄の文化や歴史について、春休みから学習をおこなってきた成果を文集にまとめたいと思います。

離村式後フェリーに乗船

お別れの紙テープが舞う港

「親子で作ろう チャンチキドラム」幼稚部保護者学習会

附属大塚特別支援学校 幼稚部主事 小笠原志乃

チャンチキドラムづくり

幼稚部では子育てについての疑問や不安を解消、軽減できたり、子育てをより前向きにできたらと、保護者学習会を行っています。令和5年度3回目は「親子でつくって演奏しよう」をテーマにアーティストの方に2回にわたって来ていただきました。NHK・Eテレ「ムジカ・ピッコリーノ」やこどもチャレンジにもご出演の、上の助空五郎さんをお招きし、湯たんぽをメインにした「チャンチキドラム」をつくりました。1日目は楽器をつくります。湯たんぽをはめる木枠の組み立てではドライバーでのねじ回しに挑戦したり、ドリルの音が面白くてお母さんの作業をよく見ていたりと、それぞれが頑張って作りました。シンバルのようなパーツや鈴など好きな物を選んで付け、2時間かけてオリジナルのチャンチキドラムが完成しました。2日目は鳴らして遊びます。空五郎さんと、もうお一方クラリネットの近藤哲平さんの模範演奏ではリズムの面白さ、クラリネットの響きに、幼稚部のみならず一緒に鑑賞した小学部児童もノリノリになりました。模範演奏のイメージをうけて親子でチャンチキドラムを鳴らして遊びました。幼稚部からのリクエストで「ドレミのうた」「とんでったバナナ」に合わせてそれぞれの音を出し楽しい時間を過ごしました。保護者の方からは制作に没頭できて楽しかった、子どもが鳴らしてくれてうれしいといったご感想が聞かれました。この手作り楽器がこれからも親子で楽しめるものとなり、一緒に作ったこと、楽しく演奏したことを思い出してくれたらうれしいです。

一緒にならして楽しもう

演奏会　いろいろな音、いろいろなリズム

中学部3年職業教育 ～職場体験学習で生きる力を～

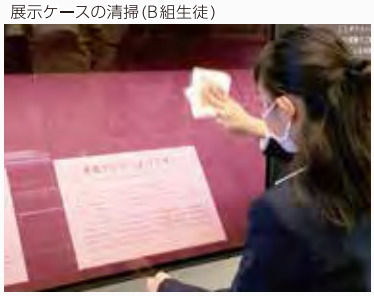
附属視覚特別支援学校 教諭 **山本夏幹**

中学部では職業教育のまとめとして、3年次に職場体験を行っています。今回は12月に、A組（点字使用）はアメディア、東京ヘレン・ケラー協会、日本視覚障害者団体連合、B組（拡大文字等使用）は講談社、東洋文庫にて、グループ毎に実地体験をしました。

訪問した職場では、卒業生が活躍している組織もあり、アナウンスなどの具体的な作業を経験することができました。生徒からは体験を通して、「仕事とはみんながお互いに協力などをして気持ちよく明るい生活が送れるようにするための行動だと思いました」「少しの動作や作業も仕事として取り組む以上は、気を抜かずに最後までしっかりとやらなければならない事がわかりました」といった感想がありました。普段どのように仕事と向き合っているのかを知る貴重な機会となり、生きる力につながる職業観を育むことができました。

広報紙アナウンス体験（A組生徒）

展示ケースの清掃（B組生徒）



きょうだいタイム ～児童が企画するきょうだい学級遠足～

附属小学校 教諭 **青山由紀**

「きょうだいタイム」は、きょうだい学級で遠足に行く行事です。1年生と6年生、2年生と4年生、3年生と5年生がペアになり、リードする学年が遠足の行き先や目的地までのルート、遊びなどを数か月かけて検討します。複数の候補地を下見することもあります。集合場所や移動経路、遊び場や手洗い場所を確認し、さらに雨天時のプログラムも考え、ペアの子どもに手書きのしおりを作って渡します。多くの子どもが上級生にもらったしおりを大切に保管していて、それを参考にしながらしおりを作る姿が見られます。

遠足は一日だけですが、それ以前の交流や準備などリードする側、そのような姿を見るリードされる側の双方にとって学びの多い活動であるため、きょうだいタイムと呼ぶのです。

児童が作成したしおり

班ごとに学年をこえて遊ぶ

「祭興 ～想像から創造へ～」第46回 欅祭開催

附属聴覚特別支援学校 教諭 **荒川郁朗**

令和5年10月27日(金)・28日(土)に欅祭が開催されました。欅祭は幼稚部から高等部専攻科の幼児・児童・生徒が参加する唯一の全校行事となっています。様々な制限から抜け出す第一歩として、各部・科の発表内容がコロナ以前の形に戻り、外部からのお客様も自由に見学できるようになりました。本校の卒業生たちは、この日を楽しみにしており、当日はたくさんの懐かしい顔ぶれと再会することができました。中学部の発表は、舞台発表を復活させ、3年生は映画、2年生は演劇を行いました。2年生の演劇は、通信技術の進歩をタイムスリップしながら検証する内容でした。生徒たちの熱演により全校一位の欅祭大賞を受賞しました。

中学部2年生 演劇の舞台発表

幼稚部の作品展示（3びきのこぶた）

筑波大学附属中学校 第61回 学芸発表会

附属中学校 教諭 齋藤正義

3年生の劇「君の名は」

本校の学芸発表会は日頃の学習を発展させた「学」、劇に代表される「芸」、「研究発表」の3つを内容として実施され、運動部と違って活動目標を設定しにくい研究会の活動を活性化しようというねらいがありました。回を重ねていくうちに、今日のようなより広い意味で生徒の日頃の文化的活動の発表の場となりました。

第61回学芸発表会のスローガンは「喜紡（きぼう）」でした。このスローガンには、過去の学芸発表会から受け継がれてきた伝統を紡ぎ、多くの発表で喜びにあふれた学芸発表会にするという思いが込められています。

令和5年度は、新型コロナウイルスの感染防止対策として来場者を分散するため、10月28日(土)と29日(日)の2日間開催で実施され、2日間で3000人以上の多くの来場者をお迎えして開催することができました。秋休み明けから、生徒一人一人が、学芸発表会の意義やスローガンの意味を踏まえながら協力して準備に励んでいました。当日は、他クラス・他学年の優れた成果を見ることでお互いに刺激を受けたり、委員会や参加団体の係や役員など、一人一人が学芸発表会をつくる一員となり役割を持って働き、人と関わる態度を学んでいました。また、2日間あったことで、1日目の発表の反省点を振り返り、2日目に活かすことができたようで、生徒達は達成感に満ち溢れていました。今年度のスローガンにあるように、本校の生徒一人一人の良いところを紡ぎ、附属中学校の良さを知ってもらう貴重な機会となった大きな喜びを忘れず、この経験を将来につなげていってほしいと願っています。

文芸同好会の展示

英語科_リーディングショー

令和5年度 教育実習・研究授業・合評会が実施されました

理療科教員養成施設 講師 徳竹忠司

研究授業開始前の授業担当者　準備は万端

令和5年度の教育実習関連日程が終了致しました。附属視覚特別支援学校の多大なるご協力を頂きまして、10月23日～11月2日を授業見学・事前指導などのオリエンテーション期間を設けて頂き、11月6日～12月4日を本番の実習期間として施設学生達は奮闘をしておりました。指導課題について充分な準備をして授業者が理解を深めていても、指導対象であります生徒の理解につなぐことの難しさを体感した期間であったと思います。最終日の研究授業では、3班に分かれ、当日に向けた教材の作成・数回に及ぶ授業シミュレーションの実施などを行ってきました。今年度の研究授業は、東洋医学概論「気・血・津液・精の病理と病証」・マッサージ実技「下腿部のマッサージ」・リハビリテーション医学「脊髄の損傷レベルと日常生活動作、家庭・社会復帰」を、実習生達が担当しました期間のまとめとして実施しました(写真上)。各授業では、グループワークを取り入れ、生徒の積極的な授業参加を促し、理解を深めるための教材にも工夫が凝らされておりました。研究授業終了後には、合評会が開催され(写真下)、研究授業の授業者・班員から反省点・良かったこと・感想が述べられ、次いで附属視覚支援学校の先生方から暖かい応援の意見・感想を頂きました。本実習が理療科教員養成施設での最大のイベントでありまして、この期間の後には、学生の雰囲気が一変することを例年感じております。新年度からは実習ではない授業が彼らを待っています。素晴らしい教員生活が送れることを願うばかりであります。

合評会のシーン
授業の反省や課題を授業者が述べ、附属視覚の教員から意見・感想を頂きました。

お芋まきまきぺ

幼稚部「晴天の焼き芋会」

附属久里浜特別支援学校 教諭
佐藤朝夏

秋の終わりを感じる令和5年11月27日(月)に、幼稚部の幼児たちは焼き芋会を行いました。

当初は20日に実施する予定でしたが、海がすぐ近くにある本校は、風の強い日が時々あり、気持ちのよい晴天だったのに焼き芋会を行うことができませんでした。しかし、予備日の27日は幼児たちの思いが届いたのか、風も穏やかにすっきりと晴れ、無事に行うことができました。

今回使ったさつま芋は、5月に幼児たちが苗を植え、11月中旬に掘り出したものです。芋堀りのときには、もうすぐお芋が出てくるというところで虫がひょっこりと顔を出し、怖くて芋畑から走って離れる幼児や、大きいお芋と小さいお芋を並べて、「親子だね。」と眺める幼児など、様々な様子が見られました。

初めてのことや、慣れないことが苦手な本校の幼児たちは、焼き芋会に向けてたくさんの活動をしてきました。さつま芋のイラストに紫色や黄色の絵の具で色塗りをしたり、お芋に関する歌をたくさん歌ったりしました。また、手作りの大きな大きなさつま芋のクッションを、学級のみんなで引っ張る芋掘り遊びもしました。

会当日は、焼き芋の準備も自分たちで行いました。教師の手本をよく見ながら、お芋をぎゅっぎゅと、上手にアルミホイルで包むことができました。焼き芋はドラム缶を半分に切ったようなコンロを使って焼いていきます。コンロの中にお芋を入れるときには、怖がりながらも身を乗り出して中を覗き込む姿や、ポーンとお芋や落ち葉を投げ入れる姿が見られました。時折ぴゅうっと吹く冷たい風を感じたり、落ち葉がぱちぱちと音を立てて燃える様子を見たりしながら、お芋が焼けるのを待ちました。

焼き上がったお芋は綺麗なオレンジ色で、とてもしっとりしていました。焼き立てのお芋をふーふーしながら食べる時間は、とても暖かでした。春から様々な活動を通して、挑戦したこと、できるようになったことが増えた幼児たちの、実りの秋となりました。

お芋焼けたかな?

まつぼっくりも入れちゃう?

まずは詳しい観察と記録から

駒場の探究 ―城ヶ島 野外実習―

附属駒場中・高等学校 理科教諭
小林則彦

都市部に暮らす生徒にとって、自然と接する機会は極めて少ない。特に地層や地質関連の自然教材は、学校側が接する場を提供しなければ、その機会が訪れることはほとんどない。そこで駒場中学校では、野外実習と称したフィールドワークを神奈川県三浦半島の城ヶ島で毎年実施している。城ヶ島は、遥か南方の海底に積もった堆積岩がプレートの運動によって日本列島に押しつけられた「付加体」とよばれる場所で、その証拠となる特徴的な地層や断層が豊富に存在する。これらを詳しく観察することで、太古から現在に至る生きた地球の営みを実感できる場所なのである。

フィールドワークは現代風にアレンジし、クエストと称した謎解き的な探究課題を課すことで進めている。例えば人の登れない崖の上部に地殻変動による隆起の証拠があると、その高さを測って隆起量を求めさせる。直接測ることはできないので、生徒はいろいろ考えて解決しようとする。多くは三角関数などの数学的知識を動員して算出しようとするが、中にはスケール代わりの人間と一緒に崖の写真を撮ることで高さを推定する班もあった。また、地層の傾きを計測する機械を使って複数地点の記録を取り、島全体の地層が折れ曲がっていることを見いださせたり、島にどのような力がどの方向に加わったのか考察させたりもしている。とはいえ、これらの課題は三人一組のパーティーで取り組むので、メンバー間で「ああでも無いこうでも無い」と議論しながらクエストをこなしていくという協働体験が、何よりの学びになっているようである。

様々な手段で崖の高さを測る

地層の解釈をめぐって議論も白熱

令和5年度第18回筑波大学朝永振一郎記念「科学の芽」賞表彰式・発表会開催 (2023.12.23)

附属学校教育局 教育長補佐 梶山正明

令和5年12月23日(土)、本学大学会館において、第18回朝永振一郎記念「科学の芽」賞の表彰式・発表会を開催しました。

「科学の芽」賞は、筑波大学にゆかりのあるノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士の功績を称え、それを後続の若い世代に伝えていくとともに、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールです。

今回、国内の学校248校及び海外9か国10校（アメリカ、イギリス、カナダ、韓国、台湾、中国、ハンガリー、バングラデシュ、ブラジル）の日本人学校等から小・中・高校生部門合わせて2,210件の応募がありました。その中から小学生部門9件、中学生部門7件、高校生部門1件の合計17件の作品を極めて優秀と認め、「科学の芽」賞を授与しました。

表彰式・発表会には、受賞者21名と付添者39名が出席されました。

本学からは、永田恭介学長をはじめ加藤光保副学長、重田副学長、金保副学長、本間副学長、池田副学長、奈良副学長、呑海副学長、服部数理物質系長、田中生命環境系長、「科学の芽」賞受賞OB・OGの伊知地直樹さん、永原彩瑚さん及び「科学の芽」賞実行委員会委員などが出席し、総勢で80名程の出席者となりました。

表彰式は、「科学の芽」賞実行委員会副委員長である雷坂浩之附属学校教育局次長の開会の挨拶で始まり、次に永田学長から各受賞者に表彰状の授与と祝辞がありました。続いての発表会では、部門毎に受賞者による発表と質疑応答が行われました。受賞者達は、スクリーンに作品の概要を投影しながら研究の成果を報告し、司会者や副学長などの先生方からの質問に身振り手振りを交えて回答をしていました。

最後に重田副学長から個別の作品へのコメントを含む全体講評があり、「科学の芽」賞実行委員会委員長である呑海副学長の閉会の挨拶により無事表彰式・発表会は終了しました。

その後、特別会議室において、「科学の芽」賞OB・OGによるミニ講演会を催しました。講演では、自身の「科学の芽」賞との関わりに触れながら、現在取り組んでいる研究のお話しなどがあり、受賞者は真剣に耳を傾けるとともに、活発な質疑応答が行われました。その後は、受賞者を囲んで、学長・副学長・系長、講演者のOB・OG、実行委員会委員が参加した懇談会が行われ、対面開催ならではの和やかで楽しい時間を過ごしました。

今年度ご応募いただいた皆様、関係者各位に深く感謝を申し上げますとともに、来年度の「科学の芽」賞もどうぞよろしくお願いいたします。

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia
vol.59

発行日……令和6(2024)年2月29日
発行者……附属学校教育局教育長 呑海沙織
発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会
〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1　電話 03-3942-6800
デザイン……スピーチ・バルーン
印　刷……広研印刷　使用紙：U-Ltimax［日本製紙］